



社報「ともかき」第20号
 【発行】妻垣神社社務所
 【発行日】令和元年8月1日
<http://www.tumagakijinjya.com>
 Tel. 0978-44-2519

↑ 令和元年5月1日、小野宮司から妻垣禰宜に宮司のバトンが渡された。(詳細はP2に掲載)

奉祝 新帝御即位

新たな時代「令和」始まる

四月一日、時代の節目を物語る出来事がありました。新元号「令和」の発表です。列島は瞬間に元号商戦が始まり、所縁の福岡県太宰府市の坂本八幡宮には連日多くの参拝者が訪れています。

「大化」から数えて二四八番目となる「令和」は日本最古の歌集「万葉集」巻五 梅花の歌三十二首并せて序「初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を被き、蘭は珮後の香を薫らす」より引用されました。

元号決定にあたって安倍総理は「令和には人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つという意味が込められております。悠久の歴史と薫り高き文化、四季折々の美しい自然、こうした日本の国柄をしっかりと次の時代へと引き継いでいく。厳しい寒さの後に春の訪

れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人一人の日本人が明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる、そうした日本でありたいとの願いを込め、「令和」に決定致しました。」と述べられています。

初めて国書から引用されたこともあり、元号離れが進む昨今、我が国の素晴らしい文化を見つめ直す良いきっかけになったのではないのでしょうか。

さて、当社は御皇室に所縁のある神々を祀っております。そのため昭和、平成の御大典においては記念大祭並びに事業を執り行ってきました。今回も前例に倣い、現在、総代会にて記念事業を展開するべく協議を重ねております。皆様には是非ともご理解賜りご協力の程宜しくお願い致します。

小野宮司が退任

後任には妻垣禰宜が宮司に就任

平成の幕が閉じる四月三〇日付けを以って小野宮司が退任されることとなりました。小野宮司は昭和六十一年よりお手伝い戴いており、平成九年、小野勲宮司逝去に伴い、禰宜の藤井武光氏が宮司に就任したことを受けて、禰宜に就任。その後、平成二十年に藤井宮司が



↑ 御社殿創建千二百五十年祭 奉祝祭 宮司祝詞奏上

平成二十年に藤井宮司が功績を残され、衰退してはなくなつてはならない方ですが、当社以外にも五社近くの神社を兼務され、大変お忙しい身でもあり、そのため当社の宮司を引き受ける際には、十年間と期間を設けて引き受けられたとのこと。小野宮司からその旨の話があった際、矢野総代長、佐藤副総代長は在任の延長を切願しましたが、小野宮司からは「氏子の皆さんに助けられ、宮司に就任してより既に十数年経過し、私も今年で六十五歳になります。平成二十九年に天皇陛下の退位の日が決定したことを受け、恐れ多いことですが御代替わりに併せて、若い妻垣禰宜へ宮司の職を譲りたいと以前より考えていました。」との強い意向を伺いました。

そこで三月の祈年祭後に臨時の総代会を開き、宮司自ら総代へ事情を説明。結果、宮司の意向を尊重し受理されました。また翌月、最後の恒例祭となった元宮祭において、宮司として最後の挨拶をおこない、感謝を伝え、総代会からは退任の記念品として「狩衣一領」を贈呈されました。

三十有余年、神社の護持運営に多大なる功績を残して下さいました小野宮司には氏子一同感謝しありません。今後は神社から一切手を引くわけではなく、引き続き協力戴けるとのことです。



記念品「狩衣」の贈呈

これを受け、四月三十日、翌五月一日の二日間に亘つて、宮司交代の儀式を執り行いました。三日午後四時より、宮司退任報告祭を斎行。小野宮司がご神前に在任中の感謝と退任する旨を報告致しました。翌一日午前零時には、妻垣禰宜が新たな宮司に就任したことを、ご神前に報告するべく宮司就任奉告祭を斎行。宮司として初めてご神前に拝礼致しました。



歴代宮司に受け継がれてきた当社の由緒本「都麻垣宮旧事記」を始め、八幡信仰の神典「八幡宇佐宮御託宣集」等々が引き継がれた。

そして、五月一日は新元号「令和」へと改元され、皇太子徳仁親王殿下に御即位遊ばされました。御即位のことを正式には「踐祚(せんそ)」といいますが、午前五時には五月の月次祭に併せて「踐祚改元奉告祭」を斎行。新時代初日ということもあり、小雨の中、早朝より参拝戴いた方々と共に新たな時代の安寧を祈念致しました。

「万葉集」に思いをはせる



↑ 妻垣稲荷神社境内石鳥居左手にある万葉歌碑（宇佐市安心院町妻垣稲荷山）

書です。

その中には大分県に所縁がある歌があることはご存知でしょうか。新元号「令和」に引用された梅花の歌三十二一首より「世の中は恋繁（しげ）

しえや かくしあらば 梅の花にも ならましもの」(巻五・八一九)

(訳) 世の中は恋の苦しみが尽きることはない。

こんなことならば、ただ美しいばかりの梅の花になりたいものです。

この歌は天平二（七三〇）年、大宰府政庁の長官・大伴旅人邸で開かれた宴に招かれた豊後守大伴大夫（おおとものだいぶ）の歌です。豊後守は現在の大分県知事のような職であり、大伴大夫は大伴三依（おおとものみより）とされ、大納言であった大伴御行（おおとものみゆき）の子とされます。父である大伴御行は竹取物語で竜の頸の珠を取りに行った「大納言大伴御行」のモデルとしても知られています。

この歌以外にも大分所縁の歌が数多くあります。特に多く詠まれた場所として由布院と久住があります。別名「遠の朝廷」とよばれた太宰府に都より派遣された役人、また防衛の役として赴任する防人たちは、九州の東の玄関口である豊

後に船で着き太宰府へと向かいます。由布院と久住は当時、大宰府に至る官道の重要な宿駅でもあったためです。

これら「万葉集」の歌は全国に歌碑として建立されており、当社境外摂社である妻垣稲荷神社の境内にも万葉歌碑が建立されています。当時の人々の思いは現代人の我々と何ら変わりようのないことが「万葉集」を通じて感じさせます。この機会に「万葉集」を読んでみる。また県内の万葉歌碑を巡ってみるといのはいかがでしょうか。

妻垣稲荷神社万葉歌碑

思ひ出づる 時はすべなみ 豊国の 木綿山（ゆふやま） 雪の 消ぬべく思ほゆ 卷十一・三三四一 作者未詳

あなたのことを思い出すと、これはもう、どうしようもありません。豊国木綿山（由布山）の雪と同じで自分も消えてしまいたいそうなくらい私はあなたのことを思っています。

大分（豊後）で詠まれた歌

「由布院の歌」

娘子（をとめ）らが 放（はな）りの髪を 木綿（ゆふ）の山 雲（雲）なたなびき 家のあたり見む 卷七・二四四 作者未詳
愛する人を残して山を越えて旅を続けてきました。向こうをみると乙女のお下げ髪のような形をした木綿の山（由布山）がみえます。
雲よ、妻の家のあたりを見たいから山の周りにたなびかないでください

「久住の歌」

明日よりは 我は恋ひなむ 名欲山（なほりやま） 石踏み平（なら）し 君が越え去なば 卷九一・一七七八 城原の娘子
明日からわたしはあなたを恋しく思うことでしょう。
名欲山（城原山）の岩を踏みならして越えて行ってしまったあなたを

命をし ま幸（さき）くもがも 名欲山 石踏み平し またまたも来む 卷九一・一七七九 藤井連広成
どうか命が無事であってほしい。名欲山の岩を踏みならして また再びあなたが会いに来るまでは。

我が国二四八番目の元号となる「令和」は、日本最古の歌集「万葉集」巻五 梅花の歌三十二首并せて序の「初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を被き、蘭は珮後の香を薫らす」より引用されました。「万

と長い伝統を象徴する国

令和の御大典

令和御大典奉祝記念祭

令和元年10月27日(日) 斎行予定

秋季大祭(例大祭・神幸祭)にあわせて、上記祭典を斎行致します。
新たな御代を言祝ぎ、国の平安と国民の安寧を、皆さんと共に祈りましょう。



夏越大祓式

来年は六月二十八日(日)

去る六月二十三日、夏越大祓祈願祭が斎行されました。六月下旬はちょうど一年の半分が終わる頃。ジトジトとした梅雨の時期でもあり、心も身体も怠くなる季節です。また梅雨明け後は太陽が照りつける暑い夏を迎えます。そのような時期におこなう大祓式は半年の



潮かき神事、潮水で祓い清める

罪・ケガレを祓い清め、心も体もリフレッシュし、残り半年を元気に過ごす古くからの慣習です。当社では平成二十一年より、総代を対象におこなってきましたが、近年、一緒にお願いを受けたこと等の声が寄せられることを受け、今回、安心院・

院内に折込チラシを入れ案内させて戴き、当日はあらゆる世代の方に参拝下さいました。古くより周防灘沿いのいくつかの神社では正月やこの時期、早朝、海で禊をおこない、潮水を持ち帰って、神前に供え、その潮水を用いて人や物を清める「潮掻き神事」が行なわれています。近隣では宇佐神宮が夏越大祭にて神輿を担ぐ者が、今でも海で禊を行っている水を神前に供えていると伺っております。今回、祈願祭において、これに倣い、早朝に潮水を汲み、神前に供えたのち、健康を祈願して参列者を祓い清めました。



さて慰霊祭はかつて遺族を中心におこなってきました。しかし戦後七十年以上が経過し、遺族を含め、当時を知る人も少なくなっています。今後の慰霊祭のあり方を考えるにあたり、遺族だけではなく、地域挙げて戦没者のご冥福、平和について考えていかねばならないと思ひ、本年より平和祈願祭と改め、実施したいと思っております。

八月の慰霊祭を前に、家族構成、亡くなる直前安心院中学校二年生が七のエピソードなど、神社の清掃活動のため来社しました。中学校では地域未来科の学習で地域の戦争遺産の調査を行っており、清掃の前に遺族会館にて慰霊祭はかつて遺族を中心におこなってきました。しかし戦後七十年以上が経過し、遺族を含め、当時を知る人も少なくなっています。今後の慰霊祭のあり方を考えるにあたり、遺族だけではなく、地域挙げて戦没者のご冥福、平和について考えていかねばならないと思ひ、本年より平和祈願祭と改め、実施したいと思っております。

宇佐両院平和祈願祭

八月二十五日(日)午後四時より